

研究通信 16

目 次

研究ノート

- 価値志向の型についてーその1ー 牧 正美 1
ある近郊村落の調査メモーひとつの自己反省 原 宏 8

学会ノート

- 西部社会学会由来記(1) 中村正夫 12
岩間巖先生の退官を記念して 堀井岸雄 16
「社会学評論」ニュース 近沢敬一 19

書 評

- 社会学における理論と実証 内藤亮爾 22

事務局通信

- * 研究ニュース 25 会員動向 23
* 第21回大会記事 24 お知らせ 26
* 第36回日本社会学会記事 24 編集後記 26
-

1964. 3

西部社会学会発行

西 部 社 会 学 会 由 来 記

中 村 正 夫

は じ め に

西部社会学会は昭和二十一年八月一日に創設され、発会式をかねて才一回大会を開催したのが同年十一月二十四日であつた。じらい、十七カ年を経過し、大会も二十一回を数えようとしている。この間に、会員の顔振れも当初にくらべると、あらかた入れかわつてしまつたようである。人数が増したということもあるが、世代の交代もかなりあつて、成立過程とは無縁のメンバーが少なくない。発会に参画し、現在まで引続いてコンスタントな現役会員として活動されているのは、おそらく、徳永新太郎、近沢敬一両氏ぐらいに限られるのではないか。とくに近沢氏は才一回以来ずつと無欠席のはずで、その点、特筆しておかねばなるまい。

そういうわけで、いまが、とりわけモニユメンタルな機会といふのではないが、このあたりで学会史の回顧を試みるのも無意味ではなかろうと思う。求められるまゝ点、特筆しておかねばなるまい。

本稿をものとする次第であるが、たゞ、わたしがその任に適しているかどうか。才三回大会から正会員となつたが発会当时、学生として多少のかかわりをもつたにすぎない。

(一) 設立のいきさつ

西部社会学会は終戦後マル一年もたゞして創設されている。日本社会学会の復活も不十分だつたし、各地方学会もまだ設立気運すらみられない頃である。諸事困難づくめの渾沌たる社会情勢の中で、いち早く成立をみたということについては、まず、当時の設立委員の並々ならぬ熱意と決断、それに各会員のそれにたいする敏感な呼応があつてのことである。敬服すべき事柄は多々ある。なかでも藏内数太博士が筆頭発起者として致された尽力のほどは、はかりしれない。博士は昭和八年十一月、社会学講座担任として九大法文学部に着任されたが、戦後の二十一年三月末をもつて、故あつて野に下られ、城

南の地、浄水町の御自宅でもつぱら斯学の研究に没頭されていた。(藏内邸は博士の阪大就任後、喜多野清一博士の仮寓となり、そのあと内藤莞爾教授に受け継がれて現在に及んでいるが、この地が歴代委員長の邸宅となつているのもおもしろい)。一方、その門下として、大学院を修めた岸川八寿治氏、助手をへて大学院特別研究生となつていた上田一雄氏(現在、阪大助教授)、助手の宮崎幸造氏(同、西日本新聞外信部記者)らがあつて、師弟の交流は、まこと血脉を通ずるの感があつた。藏内博士が耕やされた土壤に培われた門下の結合、これが西部社会学会結成の核となつたわけだが、當時、上田氏の奔走ぶりは、ことによしましかつた。同氏がその頃、西南学派の台頭をさかんに口にしていたのを思い出す。

こうした藏内シニーレの決意をいつそ補強し、発起者のひとりとしても重要な役割をつとめられたのが秋葉隆博士である。京城帝大教授であつた博士は、かの地で終戦を迎えたため、ことのほか辛苦を経験されて引揚げられたが、當時、福岡在勤中の御息女夫妻との縁故もあり、藏内博士の招請をうけて、講師として藏内博士退官後の九大社会学科をみとつておられた。両博士の友情は旧く学生時代にさかのほる。九大社会学研究室としては、外見上、きわめて不備な構えであつたにもかゝわ

らず、事実上は藏内・秋葉両博士に接しえて、学生らにとつてはまさに「日月天に隠く」の思いがあつた。

九大関係者の間に、ほうはいとして湧き起つた学会設立の気運に呼応した九州、中国各地のもろもろの研究者の存在も無視できない。たとえば、のも宿禰の身となり、ついにふたたびは起つことのできなかつた中井虎一氏(広島高師教授)は、そのユニークな学風とともに学会初期の大好きな推進力であつた。高田保馬博士との論陣で知られた銅直勇氏は、その頃、熊本師範学校長であつた。等等。

このようにして、西南日本を一丸とした社会学研究の極点を構築しようとする動きの中で、学会予備軍ともいいうべき専攻学生の急増という事態があつたことも見逃がせない。おそらく、学会発展の見透しをもつて、この事実がやはりものをいつたのではないか。ちなみに、終戦前後の九大社会学専攻生の年次別卒業者数をあげておくが、多聞にもれず、決して多くはなかつた戦前の学生数が、転入・引揚げ者をふくめていつきにふえた。とくに、二十二年度卒業組は十六名の多きに及んだが、おおむね「学徒出陣」の陸海軍復員

年 次	卒業者数
16	0
17	0
18	3
19	5
20	1
21	4
22	16
23	8
24	4

者で、ひとつはその軍隊経験をなめたつわ者どもであつた。わたしもそのひとりとして口幅つたいが、空白化した学力がもどかしく、なにがなし、やみくもに模索するつたのであつた。学会発足と平行して、学生を主体とした「研究発表会」が、蔵内・秋葉両博士のほか先輩、研究室員の参席のもとで定期的に開かれたといふのも、當時の情況を形づくる。

西部社会学会は、いふようにして、九大社会学研究室を核とした西南日本在住の研究者によつて、渴仰にも似た斯学への意欲の結実として自發的に設立された。したがつて、本学会が日本社会学会支部として承認されたのはそののち、才三回大会の議によつてである。むしろ発会当初においては、親学会の意向をはなれて独自に構想された。生活条件、交通条件は極度に困難であつた。しかし、戦後社会の再建のため、社会学の効用性はようやく一般の認識を得てきており、研究者としての必要と使命感とが、新しく地域学会を結成するよう促がしたのであつた。

「本学会は昭和二十一年八月、蔵内・秋葉・岸川・上

田氏合議の結果、西南日本在住の有志者を以て西部社会学会を組織し、以て社会の要望に応えると共に高度文化国家再建の為に寄与致す目的を以て上田委員之が計画準

た。準備委員長として蔵内博士の発会の辞に始まり、研究発表ののち、三畏閣で銅直氏座長のもとに総会ならびに懇親会がおこなわれた。研究発表はつぎの通りであつた。

(1) 社会存在の問題

上田一雄

(2) 日本上代小麦の文化社会学的考察

近沢敬一

(3) 世論

岸川八寿治

(4) 貧雇の礼

秋葉隆

(5) 米国の国民性

岩崎継生

(6) 君主神聖觀の成立過程

中井虎一

(7) 現代に於ける社会学の職分

銅直勇

(8) 社会の心理的動態法則

蔵内数太

総会では型通り、会則の審議をへて、会務会計報告、役員の選出、学会事業の件などが議せられた。会則は実質を重んずるたまえから「法三章」ともいうべき最小限の規定に限られたが、これは以後においても本学会の伝統精神とされてきたようと思う。役員は設立委員がそなまつて移行し、蔵内委員長のほか秋葉・岸川・上田三委員が選任された。また事業内容についても、(1)刊行物の企画、(2)研究会、講演会の開催、(3)共同の調査研究、その他とされた。このうち刊行物の件としては、Hand-

備に当り、日夜奔走（学会記録、原文のまゝ）した結果、秋に発会の運びとなるのであるが、これに参加した最初の会員名をあげておこう。

秋葉隆（旧城大教授、九大講師）・蔵内数太（旧九大教授、著述業）・徳永新太郎（長崎経専教授）・銅直勇（熊師校長）・岩崎継生（熊語専教授）・中井虎一（広島高師教授）・岸川八寿治（著述業）・近沢敬一（宮崎工専教授）・上田一雄（九大大学院特研生）。

中野敏夫（貴族院議員）・宮崎幸造（助手）・竹間宏（西日本新聞）・永野羊之輔（広高教授）・中島仁（弁護士）・泉靖一・村上寅雄（西日本新聞）・石島治志（N.H.K.）・城義臣・青野俊梁（福岡県畜産課長）・立仙利勝・今崎秀一・松永修治（原名簿による）

総勢二十二名のメンバーである。それだけに家族的団らんの雰囲気がかもし出され、ゲマインシャフト的結合という社会学個有のチームが西部社会学会の相言葉となるゆえんがこゝにあつた。

(1) 発会式

二十一年十一月二十四日、九大法文学部演習室で才一回大会といふ形で発会式が開催された。参加者は会員十五名、学生十八名で、その他をふくめて約四十名であつた。

worterbuch der Soziologie の共同訳出が具体的な問題として企画されていたのではなかつたらうか。しかし、これはついに、実現化しなかつたのであるが。

最後に銅直氏の挨拶をもつて会を開じたわけだが、その概要がつぎのよう記録されている。「（前略）茲にその才一回総会開催に當り、あらゆる困難にも拘らず、四十余名の参考を得、研究発表会に於ては相互に貴重な業績の発表を見た事は固より、特に社会学専攻学生に多大の感銘と刺戟を以て、總じて学への精進の途を啓示し尙特に斯学への認識を一步進める機会を得たのは、實に欣快に耐えん次第である。さて本学会開催に當つては蔵内・秋葉両氏の特別なる御指導御援助により、特に上田氏には終始無類の労を煩はし、懇親会における会食の稀なる美味は、社会学専攻学生諸氏の担当にあつて、以上の成果を挙げ得たことに、深甚の謝意を表さなければならぬ」と。「稀なる美味」の会食とはいつたいどんなものであつたか、よく思い出せない。深刻な食糧難の時代である。しかし、そこは野戦食で腕をみがいてきた復員学生の手にかかる。當時としては、貴重な材料が集積されたにちがいない。いずれ「團子汁」の中に、一切れか二切れの肉片がはいつていたのではなかつたる

うか。それにヤミで仕入れた白米飯でもついておればオノの字であつた。アルコールの水割りなどを持ち込んだかも知れない。虚脱の中から、学への研鑽によつて、なにか氣力と確信をつかもうとして集い合つた人たちにと

つては、それでも饗宴となりえたのである。そういう時代であり、またそういう人たちであつた。（未完）

（九州大学）

岩間 厳先生の退官を記念して

堀 井 岸 雄

折尾高校の原さんから、九州工大の岩間嚴先生が来春定年で御退官になるので、一文を草してほしいとの依頼をいたしました。実は岩間先生を身近かに存じあげるようになつたのは今次大戦後、先生が工大に赴任されてから、それもしばらくたつてからのことである。先生を語るにふさわしい方はほかにいくらでもいらっしゃるはずであるが、連絡その他の点でうまくいかないとのことで、不適格を顧りみずお引受けすることにした。

岩間先生のお宅には何度かお邪魔したことはあるが、いつも街頭社会学的な話の面白さにひきこまれ、座を立つチャンスを失つてつい長居をするといつ始末であつた。どんな問題にでもたちどころに答が出され、年輪の大きさを感じさせられているだけに、こうして執筆を頼まれ

るのだつたら、もつとアカデミックな話もお聞きしておくれべきだつたと思うのである。そういうわけで先生を語るといつても先生の中身を語ることはできそうにない。こういう試みにおいて、これ以上の非礼はないわけだが、先生のこと、笑つて許していただけるものと虫のいいことを考えている。それでははじめに、話のあい間に断片的にお聞きしたところをつなぎ合せて、先生の略歴を御紹介しておこう。

先生は山口県厚狭（あさ）町の出身である。一橋大で工業経営を専攻、大正十三年に卒業されてから、仙台の東北学院教授を経て、昭和元年には法政大に移られた。東京では明治学院なども兼任され、また当時の内務省の嘱託もされたことがある。次いで昭和三年、井

伊揚部頭の居城で名高い彦根市在の彦根高商に迎えられ、経営学や社会学を担当し昭和十七年まで教鞭をとられてゐる。先生は独身を通されているが、独身主義といつた勿体ぶつたものではない。学生時代にとりつかれたT・B・のために永い斗病生活を続けられたせいである。昭和十七年といえど、大東亜戦争才二年目であり、表面的な花々しさにもかかわらず、戦局はわが国を破滅に導く泥沼へと足をふみ入れて行きつつあつた頃である。この年、國家の要請にこたえてビルマ行政政府の参政官として故国をあとにされた。それから終戦まで学生生活にビリオドがうたれることになる。ところが大東亜戦争が始まる頃から、健康も臨戦態勢をととのえたものか、病魔は全く影をひそめてしまつた。何のことかない戦地に行くために病気がよくなつたようなものだ」と先生は苦笑される。ともかく今は実にお元気である。ビルマの参政官時代のことは元ビルマ総理、タキン・ヌーの英文の著書、*Burma and Japanese Army* に書かれ、その本のおかげで、後年渡米された際、思わず知己をえた由。その後ビルネオに移り、西海州支部長とボーホート県知事を兼務された。ここでは軍司令官と参謀長を除いたら最高首脳である。戦況は日を追つて不利になる。責任は重且大。何一つするにも前例皆無とあ

つて、随分苦労をなさつてゐる。「長といつもの一切お断り」という先生の「長」嫌いはこのにがい体験から生れたものであるらしい。こうしてボルネオで終戦を迎えることになるが、しまいには文官の身で戦斗の指揮をとらざるをえないはめになり、食糧に困つた挙句、雑草まで食わされたそうである。そういうわけで、生き残り日本人の送還を終了して昭和二十一年四月に最終便の病院船で帰国されたときは、栄養失調とマラリヤで慘々たつたらしい。終戦後は昭和二十二年より現在の九州工大の専任となられ、工業経営と社会学を担任し、今日に及んでいる。

西部社会学会の若い方の中には岩間先生を社会学御専攻と考へておられた方もいるかも知れないが、前述の通り御専門は工業経営である。しかし先生御自身のことはを押借すると、社会学のオールド・ファンであり、既に彦根時代から日本社会学会の正会員として活躍されている。学会歴では関西学院の大通安次郎氏よりもすこしばかり先輩といふところであろうか。もちろん日本経営学会にも所属されているので、学問的には二重国籍といふわけである。御自分で社会学のオールド・ファンと御謙遜なさつておられるが、実は「革命群衆の研究」で当局の忌避にふれ、左翼的であるといふかどでしばらく執

研究通信 17

目 次

研究ノート

- | | | |
|---------------|------|----|
| 自殺と経済 | 近沢敬一 | 1 |
| 地区労問題ノート(その1) | 千石好郎 | 13 |
| 大衆文化論の課題(その1) | 石川義之 | 17 |

学会ノート

- | | | |
|-----------|------|----|
| 西部社会学会由来記 | 中村正夫 | 21 |
| 農業の社会学 | 内藤莞爾 | 29 |

事務局通信

- | | |
|-------------|----|
| 第22回大会プログラム | 32 |
| 会員動向 | 28 |
| 編集後記 | 33 |

1965。4

西部社会学会発行

することによつて消費的大衆文化みずからを没落を招集し、やがては大衆のための新しい文化を創造してゆくためのモメントとなるのである。

また、第三の原因に見られる労働過程において疎外された人々の疎外の意識——これは消費文化を普及させる大衆の側の基盤となつてゐる——は、新しい文化の創造のためには痛となるものだが、これとて娯楽の健全化を通して逆に新しい文化創成のエネルギー源と転化される可能性をもつており、しかも新しい文化創成の暁にはその中で完全に止揚されうるものである。

このように現代の文化の消費性をもたらしている原因そのものが、消費文化から脱却し、新しい文化を創り出すための一つの契機を含んでいるとみられるわけだが、さらに具体的には、こうした新文化創造のための大衆的基盤は、さらにこの現実の大衆社会の中に条件として備つてゐるのである。すなわち、現在の大衆社会の基底になつてゐるもの、たとえば普通教育の採用、普選の実施、生産性向上とともに余暇の増大へそれは現在ではILO委員会における四〇時間労働制の採用に端的に示される)、労働運動の活潑化とともに経済的余裕の拡大、また新しい文化のための媒体となりうるメディアの発達——こうした諸事実は積極的に働きば、かつてのエ

ション過程での主体性の漸次的形成、さらにはこうした主体性の形成の結果としての対話的コミュニケーションの成立等を主張し、大衆が文化過程に創造的主体として参加する大衆文化行動の起点を現状のテレビを中心とするマス・コミ界に安易に求めていこうとするものも存在する。がしかし、このような大衆文化の主体性の把握の仕方が、マス・メディアの機能の現象面への注視のみによつて生まれたものであることは明確であり、そうした意味でこうした最近のマス・コミュニケーション理論のもつ一面性は、それが往々にして陥りがちな大衆の文化創造のキヤバシティを無限定に拡大する傾向と併せて、極めて滑稽なものとなつてゐる。エリート主義を排して

リートに対する奴隸のような機能を果すことにより、大衆のための新しい文化の創造の促進剤となりうるのである。さらにこうした事実に加え、かつてこのエリートの

文化が民衆の意欲を吸いあげることによつて自己を文化として形象化したことを思いあわせれば、現在の大衆の中に新しい文化創成のためのキヤバシティを期待するとは、まんざら不可能とはいえないであろう。

しかる現実として、資本主義的商品文化の桎梏を排除して新しいデモクラシーに立脚した大衆のための文化を創成することはそう容易なことではない。したがつて、そうした新しい文化創造の動きは、今のところ、わずかに、大衆のみずからの方で文化活動を積みあげていこうとする文化の創造運動(サークル運動、演劇運動等)や、マスに働きかけパブリックをつくりだし、そのパブリックを中心とした文化を創造しようとする「大衆文化から公衆文化へ」の移行の提唱の中に見られるにすぎないのである。もつとも最近の大衆文化論のなかには、テレビ時代のマス・コミュニケーションの「同時性の機能」を強調しつつ、マス・コミュニケーション過程におけるディス・コミュニケーション(たとえばテレビドラマにおけるNG)の発生、それにともなう送り手からの一方交通をはばみながらする受け手大衆のマス・コミュニケーション

デモクラシーの地点にたつた昇華と知的化という文化の機能を果しうる新しい文化を創造することを目的とする大衆文化論のあり方が要請されるのは、このような現状における大衆文化論の不毛性に照らして見てのことである。

(注) ここに用いた△文化▽の概念は、文化人類学における行動様式全般を指すものとしてこの広義の文化概念とは異なり、精神文化と呼ばれるカテゴリーに属し、文学や芸術や科学等のようによる昇華と知的化との機能を果すことを理念とした文化を指す。

(九州大学大学院)

学会ノート

西部社会学会由来記(Ⅱ)

中村正夫

曰 「研究発表会」

西部社会学会発足当初、九大社会学科専攻学生は準会員という資格で参加を認められていた。この学生会員と

研究室員を中心として、ほぼ隔月に催されたのが「研究発表会」である。これには蔵内、秋葉両先生をはじめ、岸川氏などの在福先輩も列席し、活発な討論がかわされ

たものである。

昭和二十一年十月末の発会式について、十二月某日「第二回」研究発表会が九大法文学部小会議室で開かれた。プログラムをみてみよう。

- (1) 社会と個人 高田社介(昭22・9卒)
(2) 社会学の領域 宮崎幸造(助手)
(3) 社会本質論 萬成博(昭22・9卒)
(4) アメリカ社会学 杉橋龍治(副手)
(5) 芸術に於ける階級斗争 山本博之(昭22・9卒)
(6) アメリカ社会学 木下英郎()
- ※(7) 原始的所有の個別性と共同性 大蔵寿一()
- ※(8) 支那社会研究序説 高倉又二(昭23・9卒)
- ※(9) 文化社会学(A. Weber) 上田一雄(特別研究生)
- みられるように、主として一年後に卒業をひかえた学生たちであつた。おうむね理論志向的であつたが、いざ大形な題目をかかげ、内容もかなり未熟であつたにちがいない。だが、先輩、教師の懇切な指導討議が展開され、當日中に全部を消化しきれず、大蔵・高倉・上田三氏の発表(※印)は後日に持越しとなる活況であつた。
- 第三回研究発表会は翌年一月十九日の午後一ぱいをつ

ないきさつがある。研究発表会のちようど一月前、占領軍の民間情報教育局(C.I.E.)の世論・社会調査課にてパツシン氏(シカゴ大学)が、来E中のクラツクホーン氏(ハーヴアート大学)とバズ氏(ミネソタ大学)を陪同し、九州旅行の途次、社会学研究室を訪れて咸内・秋葉両先生と懇談する機会があつた。その際、クラツクホーン教授は、多分、「The Concept of Culture, 1945」の稿本ではなかつたかと思うが、両先生に贈呈した。秋葉先生が早速この論文を吟味されて、紹介されたわけで、すでにナヴァホ・インデアンの研究で著名であつたクラツクホーンの見解は新鮮なものであつた。

研究発表会はこのようにして九大社会学研究室を中心とした研究活動であつたが、それは西部社会学会の核であり、活動の日常化といつてもよかつた。この研究発表会はのちに「集談会」に切り換えたが、同時に上田一雄氏の山口経専就任、学生数の漸減、そして新学制への移行による混乱といつた事情によつて、実質的な運営はできなくなつていつた。

西部社会学会は独自の目的と構想のもとに設立された。極度に困難な生活条件、交通条件は全国的な学会活動を

いやして行われた。たまたま非常勤講師として来講中の中井虎一氏(広島高師教授)による「原始文化」の特別発表があつたほか、秋葉先生の「文化の概念」と中村の「福岡刑務所看守調査報告」が同時になされた。

「看守調査」について、ちょつと付言しておこう。この頃、戦後のインフレはすさまじい勢いで昂進していく。しかし一般的には、労働組合運動によつてそれなりに生徒組合を結成できず、生活条件の改善はとく渋滞しがちであつた。この問題に注目して、當時三年次の学生が、看守の生計調査を計画したのである。さういふ所長の奸意的な了解と若干の財政的な援助が得られてとどこおりなく実施することができ、結果はいちおう待遇改善資料として役立つことができたのである。藤崎にある刑務所の高い赤レンガ壁の中を直接に訪れた嚴冬のいく日を懐しく想い出す。社会調査の訓練も経験もない学生が、まったく自主的に立案企画したこの看守調査は、この頃としては実証的な調査研究の口火となつた。だが、その背景にあつて、学生たちの意欲を触発した研究発表会の意義を大きく評価しなければなるまい。

秋葉先生の「文化の概念」は、たしかクラツクホーンの論文を紹介されたものであつた。これにはつぎのよう

不可能としていた。このため西部社会学会は、ある程度、自足的な機能を果す必要があつて、大会は年二回、春秋に開催される規定であつた。したがつて第二回大会は昭和二十一年六月二十二日、九大法文学部で開かれることになる。研究発表はつゞのとおりである。

- (1) 宗教社会学 (1) 宗教社会学
(2) 西ニューギニヤ原住民の部族構成 (2) 西ニューギニヤ原住民の部族構成
(3) 楊子江沿岸民家と河南の民家に就て 援護会 援護会
宮崎工専 泉靖一

- (4) 未開社会研究法に就て 熊本語專 岩崎継生
(5) 女性中心説に就て 広島文理大 上田一雄
(6) 知識社会学の問題 山口経専 中井虎一
(7) 交友関係と性格 西南学院 今崎秀一
(8) 民族学と社会学との関係 九大 秋葉隆

著「朝鮮巫俗の研究」によつて、この分野ではゆるぎない存在であつた。泉靖一氏は先生の愛弟子である。いまやアンデス文化研究の第一人者であるが、その精力的な調査活動はとつづく定評となつてゐた。このとき戦時中のニューギニヤ現地調査の成果が報告されたのである。

当時みずから朝鮮引揚者の一として、元京城大医学部

関係者とともに、在福のまま医療その他の援護活動に従事されていたが、泉氏にとってこの頃がおそらく生涯で一番苦難の時代であつたにちがいない。近沢氏の発表は、日中戦争従軍中の見聞にもとづくものであつた。

第二回大会では有力な新会員の加入があつた。志水義暉（元佐賀高校長）、原不知夫（現尙女短大）、坂田太郎（山口経専、現一ツ橋大教授）、梯明秀（第六高校、現立命館大教授）の諸氏であるが、とくに坂田教授は一ツ橋大転勤まで、学会の指導的メンバーとして多大の尽力をされた。

第二回大会の総会で、年二回の大会のうち一回は、九大以外の当番校を会場として開催する方針が打ち出された。上田氏の積極的な発議により、手初めに第三回大会を早速山口経専でもつことになつた。「文化の日」と改称された十一月三日であつた。

第三回大会は初期学会の重要な転機を画した。まず研究発表の質量における拡充ということがある。題目は省略するが数において十二、第一、二回大会にくらべると、各個の研究分野に相即して、内容がぐつと明確に表示されるようになり、ヴァライエティにも富んできた。万成氏とともに、中村が正会員として参加発表した最初の大

会でもあつた。

つぎに持廻り学会の意義が実証されたことである。山口の有力なプロモーターは上田・坂田の両氏であつたが、さらに社会学派人文地理学者の小寺廉吉氏が加入された。それどころか、本大会には地元傍聴者がかなりあつて、その頃まだ社会学になじみのうすかつた開催地で、斯学への認識を深める啓蒙的な効果の大きいことがわかつたのである。こうした確認の上に立つて、第四回大会とひきつき岩崎継生氏と銅直勇氏の在任中、熊本市で開催されることに予定された。

いまひとつ、第三回大会において西部社会学会を日本社会学会支部とする件が決議されている。さきに十月二十五日、東大で日本社会学会総会が開催され、全国的な学会活動の再建が議せられた。これに連絡して地方学会を支部として組織することが案件となつた。総会に出席した蔵内・上田両氏がこれを本大会にはかつたところ、会員こそつて賛意を表し、ここにあらためて「日本社会学会支部西部社会学会」として一步をすすめることになったのである。このあと、委員によつて支部学会としての具体的な性格が話し合われたが、親学会からの一部財政支援があるほか、相対的な独自性を保持することで決定をみた。基本的には、この関係が現在に持続している。

ところで、地方学会設立の氣運はやがて全国的なものとなつた。関西社会学会、東北社会学会、北海道社会学会、関東社会学会などが相ついで結成され、全国組織がこれら地方学会によつてほぼ完全に分割されるようになるのである。（未完）

（五）西部社会学会の展開と蔵内委員長

第四回西部社会学会は予定通り、昭和二十三年五月九日午前八時より、熊本師範学校女子部において開催された。銅直勇氏が校長として就任しておられたわけだが、男子部よりも、熊本城直下の坪井町にあつて、交通も至便な女子部に会場を設置されたのであらう。しかし、ごく近距離に繁華街があつたが、物資不足の時節柄、「探訪」の興味にそそられるようなモノも余裕もさらさらなかつた。空襲で焼亡した熊本市内の宿泊施設はばはだ不完備だつたし、坪井川の対岸にある附属幼稚園に貸蒲団を運び込み、会員の臨時宿舎にあてられたのが格別のご好意であつた。

研究発表は山口大会にくらべてやや低調とならざるを得なかつたし、発表者も八名にすぎなかつたが、この大会はすくなくとも二つの点で重視されなければならない。第一は、昭和二十三年四月一日付けで九大に赴

任せられた喜多野清一教授が、この大会で正式に会員となられたこと、および、こののち積極的なメンバーとして活動するようになつた羽倉一雄（宮崎農大、現大分大学教授）、八木佐市（広島工專、現広島大学助教授）、河村十寸穂（山口師範、現横浜国立大学助教授）、河西林孝正（八幡製鐵工場診断掛長）の諸氏が新会員として参加されたことである。

第二回には、役員制度に根本的な改革が加えられたことである。創立当初、役員は前言しておいたように、蔵内委員長のもとに秋葉・岸川・上田の三委員があつた。第二回大会では岩崎継生・宮崎幸造両氏があらたに追加された。こうした構成をみてみると、はじめは本部事務局要員に役員が限定されていたのであつて、その後、上田氏の山口転出、ついて熊本大会に備えての岩崎氏というように、漸次地区担当委員の性格が自動的に加味されるようになつてきたのである。そこでこの際、西部社会学会のエアリヤを完全に地域的に組織し、その地域代表委員として学会の企画運営を執行してもらうという案が提起された。その結果

広島・岡山地区

中井虎一

南九州地区（宮崎・大分） 上田一雄

岩崎継生

西九州地区（佐賀、長崎）

徳永新太郎

北九州地区

藏内敏太

本部

喜多野清一

といつた顔振れとなつた。役員組織の再編成は、そのままで西部社会学会発展の一里塚といつてよかつた。地域代表制の委員選出方式は現在に踏襲されている。しかしながら、地域区分そのものは、この以後とも、会員の分布密度に応じて、かなりフレキシブルなものであつたことはいうまでもない。

第五回大会は、ふたたび九大で開催された。同年十一月十三日、午前九時に開始して午後五時終了。その間、十六人の研究発表者が午前午後に分れて、相次いで演台に立ち、極めて盛会裡に進行した。しかも午後一時よりは、一般会員の研究発表と並行して、別に「公開講演会」がはじめて試みられた。九大側もこれを本学会と共同主催とし、「特別講演会」と銘うつて、ひろく学内に呼びかけたのであつた。講師とその演題はつぎの通りであつた。

社会人類学の最近の傾向 九大 古野清人

最近の日本の動きの社会学的解釈

元文理大教授 文学博士 綿貫哲雄

古野教授は周知のように、喜多野教授と前後して、文

学部宗教学主任教授として就任されたのであるが、デュルケーム紹介や宗教社会学研究によつて同教授の会名を知つていた学会員にとつて、この講演に多大の期待をおぼえたものであつた。古野教授はこの講演で、英米における人類学の発達の現状を体系的に説明され、とくに原始未開社会を対象した文化人類学が、文明社会へのアプローチを試みるようになつて、社会人類学という有力な部門が成立した、といつた人類学の学的展開を解説された。こんなにではもはや常識となつてゐることかも知れないが、當時としては感銘深い新知識であつた。

綿貫博士はすでに第一線を離退しておられたが、たまたま西下の日程を繰り合せ、かたがた日本社会学会との連繫を助成する目的で参加されたのであつた。絶妙な話術の中に、方途まだ定まらぬ戦後民主主義の性格を、明治維新以後の史的發展の一貫として社会変動論的に解釈し位置づけようとしたものかと記憶していく。

(1) 役員改選の件 この件では、藏内委員長が辞退され、

かわつて喜多野教授が新委員長に就任されたこと、また北九州地区委員を藏内委員にかわつて、新会員の古野教授が就かれたこと、および本学会の内外の充実にともない会長制を採用することとし、秋葉隆先生を推举し総会でもまた重要な議題が山積していく。

たことなどである。九六文学部の関係学科スタッフの拡充を反映して、本学会主腦部も大移動を余儀なくされる段階にきたのである。

(2) 会費値上げの件 発足当時、本学会の財政は会員の会費負担をまつたく期待していなかつたのである。当初の財源となつたのは、藏内、秋葉兩先生がボケット・マネーからそれぞれ五十円ずつ、さらに藏内先生の法政大時代の教え子で熊本出身の国会議員、城義臣^{ミヤタケ}が大枚一千円、計千百円であつた。これは当時としては第一、二回大会や研究発表会を維持するに充分な額であつた。しかし、インフレの昂進と寄附の不安定は、会費の徴集による財源確保の方法をうながし、第三回大会で年額二十円が決議された。これでもすぐ戻りのインフレについてゆけなくなり、第四回大会では五十円に値上げとなつた。そしてさらに、第五回大会ではへらやく百円が提案された。本学会の会費は現在でも常に内輪に見積られているが、それにしても、初期の財政事情は夢のようを語である。

(3) 新会員の推薦の件 本学会への加入は、はじめから会員の推薦による定めであるが、この大会では相当数の新会員が推薦をうけた。伊豆川浅吉、大河内清爾、野久尾徳美、赤羽豊次郎、向井利昌、進豊紀のほか、

古野教授、九大社会学科卒業生の高倉又一、柴田勝彦、松尾正諸兄であつた。

(4) 第六回大会開催地の件 翌年五月上旬、大分大学を

当番校として開催することに決定。

(5) 学会運営方法の件 (イ) 従来の研究報告要旨をまとめ便覧とする件が前大会で提案決議されていたが、その推進をうながされたこと。(ロ) 第三回大会で決定をみた日本支部の件は、全国的な機運が燃せず、当初誘致した親学会の態度が未決定をままであること、(ハ) 日本社会学会理事会の構成に関する、西部社会学会の存在を配慮するよう要求すること、(ニ) 本学会の研究発表を人文科学委員会に反映させること、等々が問題とされた。

第五回大会は、このようにして本学会の新しい飛躍を約束する跳躍台ともいふべき大会であつた。そして对外的にも本学会が自己を主張しようとする自覚と自負にあふれた充実の大会であつた。

しかし、何よりも本大会の意義を象徴したのは藏内委員長の辞任という事態であつたろう。藏内先生ご自身としては、本大会のとき、すでに大阪大学文学部へ復帰されべく、出版が既定の事実となつてあり、一方喜多野先生が九大社会学主任教授として就任されたという客觀

的条件ができていた。藏内先生は西部社会学の生みの親である。創立者である。そして結成の主体は藏内シユーレを形成する先生の弟子たちであつた。藏内先生によつて生み落された卵が、この第五回大会にして孵化され、

さらに自立の第一歩を踏み出そうとするその時点において、バトンはいまや喜多野教授へとタツチされたのであつた。

(九州大学)

会員動向（アイウニオ観）

間 場 寿 一	同志社大学助教授 京都市下京区万寿寺通烏丸西人362
伊 藤 芳 枝	山口県立女子短期大学講師 山口市宮野 山口女子短大公告
岩 見 国 夫	山口県立宇部中央高校教諭 宇部市西梶返 桂太良方
潮 見 実	桃山学院大学経済学部教授 大阪市住吉区帝塚山中1丁目111
近 泽 敬 一	山口大学文理学部教授
坂 井 信 生	九州大学文学部助手 筑紫女学園短期大学助教授
土 居 平 夫	佐賀大学文理学部教授
山 本 文 三	山口大学文理学部助教授 福岡市屋形原古野69の23
吉 原 恵 美 子	九州大学文学部助手（社会学）

農業の社会学

内 蘭 華 爾

この文章は、「雑想」どころか、「雑草」に近い。そ

れならなぜそんなものを載せようとするのか。こう言わ
れると困るのだが、ただこの学会は、いわゆる「同志的
結合」からスタートした。その昔にちよつと甘えてみた
い、そんな気持からなのである。

これまでいろいろムラを手がけてきたけれども、どう
も近ごろお手あげである。少なくとも、そうなりそうな
気がしてならない。社会階層を例にしていうと、こんな
ことになる。

もともと経営の単位は、家族ということになるから、
層化のユニットは、世帯と見立ててよい。もつともこれ
から出てくるのは、「経営階層」であつて、「社会階層」
ではない。が、とにかく大まかなフレイとして、経営反
別を取りあげるのが普通だつたわけだ。ところで経営反
別が取られるのは、いうまでもなく、居住世帯が農家で
あるためだ。また兼業農家を含むにしても、農耕を主と
していないと具合がわるい。それが近ごろ怪しくなつて
じがする。

きた。

離農と兼業化の進行のためである。早いはなしが、専
農よりも兼農のほうが暮らし向きが良い、というのでは
どうもならない。それに経営反別といつても、これまで
は水田のそれに重きが置かれていた。ところが成長作目
は、果樹をはじめとして、畑作のほうに移行していく。
また畜産のように、農地とほとんど関係のない部門が進
出してきた。一層具合がわるいわけである。

それに層化の母体をなすはずのムラリ部落が、だいぶ
んはころびてきた。自然村とか村落共同体とかいつて、
社会的に、また人間関係の方面で、相対的に完結性がう
たわれたムラだつた。バスやスクーターで、二、三分で
通りすぎるご活世である。どんなに絡みあつた家連合で
も、またどんなに陰にこもつた権力構造でも、昔のまま
ということはできない。ことに町村合併後は、政治、經
済の諸領域で、校区の存在が大きく伸びてきたような感

研究通信 18

目 次

故大山先生をしのんで

弔 詞	内 藤 華 爾	1
大 山 先 生	大 蔦 寿 一	4
故大山先生をしのんで	真 鍋 隆 彦	5
大 山 先 生	西 山 美 瑶 子	6
大山彦一先生をしのんで	原 宏	7
大山先生の胸巻	鈴 木 宏	8
故大山彦一教授略歴		10

研究ノート

観光ブームと入会権の行くえ	大 蔦 寿 一	15
社会調査の難かしさ	西 山 美 瑶 子	18

学 会 ノ ー ト

西部社会学会由来記(Ⅲ)	中 村 正 夫	23
--------------	---------	----

書 評

鈴木広訳編「都市文化の社会学」	篠 原 隆 弘	30
-----------------	---------	----

事 務 局 通 信

会 員 動 向		14
編 集 後 記		35

農家で、「現状のままでよい」とするものは第一回調査に比べて著しく減少した。専業農家で「現状のままで上くない」と答えたもののうち、今後の望ましいあり方として、前表1、2への答はほぼ半数つつに分れる。しかしその「具体的な事項」としては甚だ共通性があり、区画整理、河川の改修、土地改良事業、等を名々指摘しており、彼らの実際の生活上での必要が奈辺にあるかを察知できる。

この調査は全般的にいつて地元の人々からは細々と書いて面倒がられたところもあるが、この機会に何時も自身の立場の言いたいことを言わせてもらおうという意図もあつた。調査票や面接でみられた不満事項の最たるもののは買収の方法であり、調査票に、質問事項への答は抜きにして専ら不満や憤りだけを記したものも幾つかあつた。部落一律に買収という形ではなく、これには部落内で個人の思惑もあり、また農民運動などの流れもあり、皆の足並みが揃わなかつたこともあろうが、府のほうで

各戸壊破の形をとつたこと、しかもその買収価格がゴネ得的に段々つり上げられてきたことに対する不満、不信ががみられ、これがコミュニティの連帯性に多少とも影響を与えていることも事実であろう。買収される側としては、一方的通達でなく話し合いの上なら我々は納得して協力出来たのだが、と話し合いの政治を強く望んでいた。団地建設のプランは地元民の意識をそん度し、地元民の実状を詳しく調査することなしにいわゆる大局的見地から作製されている模様であるが、そうして土地を失つた農民はいわばつき離された状態におかれているが、こういう際に、社会調査がタイミングからいつて後手に後手に廻つてゐるのを悲しむものである。

調査はあくまで民衆のためのものでなければならぬし、民衆がそれを認める時事実が告げられるであろうし、その結果がまた民衆に還元されて全体社会の進展に寄与するという、社会調査におけるフィードバック的あり方を、この調査でまた改めて考えさせられたのである。

学会ノート

西部社会学会由来記（Ⅲ）

中 村 正 夫

に研究成果を開拓するなど到底できる相談ではなかつた。

昭和二二年四月、学校教育法の公布施行によつて、いわゆる六・三・三・四制の単線型学校体系に改められたが、これと同時にまず新制中学が発足、翌二三年に新制高校、ついで二四年には新制大学が成立した。旧制の高等学校・専門学校は、これによつて大方「大学」となつた。しかし看板はどうでもいい。問題は新制大学の中味であつて、これは今もつて毀譽褒貶の存するところであるが、社会学にとつて重要なことは、教育課程が改編されてその命運が大きく変化したことである。旧制では社会学の講座が設置されていた特定の大学を除くと、社会学の講義が開かれていた大学・高専は稀有に近かつた。したがつて、社会学者でそれらの大学・高専に職を得たとしても、せいぜい「法制経済」とか「倫理学」ないし「哲学」といった科目を受持ち、そこで僅かに社会学的素養をおわせるのが積の山。正規の授業の中でマトモ

「社会学」は新制大学の教科目として固定席を確保した。むしろある意味では重視されさえした。このため、

新制大学の教育課程によつて、「社会学」はまず、一般教育課程で社会科学系列中の選択必修科目の一つとされた。教員養成制度の上でも、「社会学」は「教育社会学」と並んで免許単位に加えられた。さらに新制大学としての学部学科編成に際して社会学科が創設され、専攻学生の教育が行われるところもできた。こうした新しい事態の到来によつて、たちまち社会学者の需要が急増した。新学制そのものが米国の教育政策に強く影響されたのであるが、アメリカン・サイエンスの社会学も、ここにあらためて陽の目を見る機会が訪れたのである。こんにち、日本が米国につぐ多数の社会学人口（ソ連は一応除外するとして）を擁するにいたつたそもそもその素地は、このようにして築かれた。

従来仮りの椅子に座つていいた社会学出身者が本然の位座に着くことができたばかりか、隣接部門からの補充する必要であつた。西部社会学会員の所属機関がこのとき名目を一新したことはいうまでもない。それどころか、もつと特記すべきことがある。それは本学会の主要メンバーが相ついで地域外に転出されたことである。前にもちよつと触れておいたが、創立以来の委員長であつた蔵内先生が、二三年十二月をもつて、大阪大学法文学部教授にご就任のため福岡の地を離れられたあと、第五回大会で会長にご推戴した秋葉先生が、翌二四年四月付けて新設早々の愛知大学文学部長となられ、これと前後して熊本師範学校長であつた銅直先生も横浜国立大学学芸部へ転出された。大きな欠落といわねばならない。ただし、二四年九月に徳永教授が九大教養部にご着任、すでに喜多野・古野両教授によつて固められた本部陣容がさらに拡充されるという望ましい事態の進展もみられた。

こうみてくると、新制大学発足の時期は、西部社会学会にとつても、喜多野教授を二代目委員長とする第二期への進出の転機でもあつたといえよう。第六回大会は、かくて昭和二四年十一月十九、二十日と大分大学経済学部において開催された。常連の阪田氏をはじめ研究報告まで予定されていた山口大学関係者三氏（潮見・上田・

河村）が急用しゆつたいのため欠席されることになり、会員の参集は意外に淋しくもあつたが、第一回目は午前学内講演、午後公開講演（教育会館）、第二回目は終日にわたり十人の研究報告がなされるなど、それなりにバラティイに富んでいた。学内講演は学会創立以来無二のシンバである大道安次郎教授が日本社会学会より派遣されて遠路来席されたのを好機に、同教授の博士論文にも関連ある『アダム・スミスにおける経済学への動機－社会学の演習－』をお願いした。公開講演は『現代の社会思潮』大山彦一・『アメリカ社会学の現状』喜多野清一の二本立てであつた。

ここに若干の言葉をつけ加えて、今は亡き大山彦一教授をしのびたい。

大山教授が西部社会学会にはじめて参加されたのは、実にこの第六回大分大会であつた。大会前日、われわれは一足先きに別府郊外にある龜川の保養所に宿をとつて会員の参集を待つうち、夕暮れ近く、喜多野委員長より大山教授を別府駅に出迎えるようにとの命をうけた。私は執行君と同行して駅にかけつけ、まだ面識もない教授の到着を改札口附近に待ちうけた。現今の混雑振りとはちがつて、時節柄まだ昇降客はさして多くなかつた。何とか見究わめはつくだろうと思つていたが、果して中に

ひと際背が高く、やや猫背気味の気品のある顔立ちの紳士があつた。しかし、かなりくたぶれた背広にもまして、両肩にした粗末なりユツクサツ姿が一見『買出し』帰りのようにも思われた。だが、ほかにはそれらしい人も見当らない。やり過して後から近づいてみると、リュックにO Y A M Aとローマ字で大きく記されているのが目についた。「大山先生！」とつさに呼びかけると「ハツ」と吃驚されたような返事がかえってきた。二、三、挨拶のやりとりの後、鹿児島弁なまりのある教授の举措に、何となくえこじなところが感じられる反面、稚氣を多分に貰えられた人柄のよさが強く印象づけられた。当夜、龜川の宿で、西部社会学会における大山教授の評価はほとんど決定した。語り縦横の『特別講義』は聞くものをして魅了せすにはいかつた模様である。というのは、事務局を担当していた私は、別室にてつい拝聴する機会がなかつたから。でも、これ以後大山教授自演の特別講義は、大会ごと最も好評をえた前夜祭の一幕として恒例化した感があり、いくどか抱腹させられる場面を経験したから推量がつく。

明けて十九日午後、大分市教育会館での公開講演、『現代の社會思想』は古今東西の國家思想を博引傍証、みずからその言説に酔い、酔うほどにまた名言名句を発

するという調子のよさ。このときの論旨は共産主義と自由主義の決定的対立を指摘しながら、戦後日本のとるべき途は、兩者いずれかの早急な結論づけにあらざるべく、むしろ一步さがつて確乎たる教養基盤の構築にあると主張されたといふ。実はこれも私は直接聴いていない。しかし当時の研究室員の中には陶酔に近い強烈な感銘をうけたものが何人かいた。

第二回目、研究報告会のあと総会では大山教授を万場一致、司会に選出された。軽妙そのものの名司会、これも以後追隨するなき教授の専任になつた。だから第六回大分大会における大山教授の参加は極めて意義深い。しかもこの出会いが実現するにいたつた背後には、喜多野教授と大山教授の二十余年來のかわらぬ友情があつたことを、私なりに銘記しておきたいと思う。大山教授は戦後満洲から大変など苦心のすえ帰国され、慰やし得ようもない哀しみを故郷に耐えておられた。二二年春から母校七高の教壇に立たれ、ついで新制鹿児島大学に配置換えとなられて、社会学科の設置に奔走されるなどの努力をいたされたが、なお物心のこ苦勞が多かつた。たまたま喜多野教授の九大着任、委員長就任という事態が発生し、これに呼応して大山教授の学会参加、遇するに講演会開催、そして友情出演となることになる。両教授の友

説が西部社会学会という舞台の上に再び花を開くことになつたのである。

〔七〕 「光は西」

「ヒカリハニシ」 第六回大分大会によせられた綿貫哲雄先生の電文である。昭和二三年の秋十一月、先生が九州旅行の途中、九大に立寄られた機会にさやかな歓迎会を催したことがあつた。その機縁で祝電を送られたのであらうが、時宜を得た励ましの言葉であつた。

第六回大会の総会では、(1)日本社会学会との関係(支部となるも所属会員は別箇)、(2)委員組織の改正(熊本・大分地区と鹿児島・宮崎地区を分離)、(3)会長制廃止と名誉会員制の設置(秋葉会長の転出後廃止し、新たに学の三先生)、(4)準会員制の廃止と学生会員制の設置(新制大学における社会学専攻学生の処遇を改正するため)などが議せられた。このあたりで制度改革の必要が徐々に生じてきたのである。会員もまた漸増の気運を辿りはじめた。このとき大道安次郎教授をはじめ大分大学から富来隆氏外三名、広島大学中野清一氏、山口大学潮見実(現桃山学院大学)、長崎商業高校渡瀬浩氏(長崎大一現大阪府立大)および九大卒業生五名の新入会員を迎えた。

十一月二六日(九・〇〇・一・〇〇)

司会 内藤莞爾

(1) 社会の本質について 田川高 細川順一
(2) 全体社会と基礎社会 神戸大 向井利昌

——マッキーバーのコミュニケーションを中心として——

社会意識の顕在化

福岡商大 今崎秀一

日本社会学の系譜

熊本短大 岩崎繼生

経営社会学の日本の課題

九州工大 岩間敏

労働科学と社会学の交錯点

山口大 潮見実

同日(一・〇〇・一・七・〇〇)
司会 古野清人

(1) マリノウスキイーの「三欄法」に関する二三の問題

九大 德永新太郎

(2) 原始的色採論考——特に赤色について

中西定雄

◎ 地域社会研究協議会

(1) 濱戸内海漁村の社会的生態 岡山大 谷口澄夫

島根大 山岡栄市

(4) 柳川藩の田制

Cross-cultural indexについて

ミシガン大 日本研究所 E・ノーベック

漁村の社会学的研究

島根大 山岡栄市

伝習高 大藪寿一

ている。

第七回大会はマル一年後、二五年十一月二十五、六の両日に九大文学部で開催された。この大会は喜多野委員長の新構想が見事に开花し、質量ともに極めて充実した内容のものとなつた。長きにわたるが、大会プログラムによつてその概要を記すことにしよう。

十一月二十五日(九・三〇・一・二・〇〇)

司会 近沢敬一・徳永新太郎

(1) 芸能の社会学の一考察 九 大 真鍋 隆彦

(2) 社会集団としてのコルボーズの成立

東京外語大 小森哲郎

(3) 荷風文学と社会学 長崎商高 渡瀬浩

(4) 経営社会学の指向 宮崎力藏

(5) 少年問題研究協議会 同日(一・三・〇〇・一・七・〇〇)

司会 岩崎健生・喜多野清一

(1) パーソナリティとデリンクエンシイ 九 大 執行嵐

(2) 犯罪社会学の諸問題 熊 大 岩井弘融

(3) 個人記録の問題 九 大 内藤莞爾

(4) 少年保護対策について 福岡家裁判事 藤巻三郎

(5) 保護少年対策について 福岡少年保護別所長 正田浩四郎

この頃、国際情勢は東西の冷戦という形で急激に深刻化していた。朝鮮半島では現に戦火があつて北鮮・中国連合軍は釜山の背後に迫るという切迫した危機感がみなぎついていたし、ことに板付基地から発進するゼット機の豪音は間断なく続いていた。国内的にも戦後インフレがシヤープ勧告の荒療治でやや落着きをみせてきてはいたものの、人心の荒廃、教育理念のとまどいの中から青少年対策が大きく浮び上ってきた。しかも家庭裁判所の設置、わけても審判制度の導入という司法制度上の変革は、少年問題に関する社会学的接近を要請していた。少年問題研究協議会は極めてアップ・トゥ・デイトな催しだり、現場当局と研究機関の交流が結実したという点でも意義があつた。

一方、地域社会研究協議会は農村社会学の先達である

喜多野教授を中心とする新しい学風の展開を象徴した。

ことに岡山市に設けられたミシガン大学の日本研究所員エドワード・ノーベック氏は、同大学で作製した

Cross-cultural index の効用を紹介して異色をそえる

など、西部社会学会員の関心がようやく地域社会の実

証研究に集中していく趨勢につきその拍車をかけた。

ちなみに、この年の夏、入学会の連合組織が成立し、第一回の共同調査が対馬をフィールドとして実施されてい

る。本学会関係者から古野教授が本部委員として、喜多野教授と当時大学院特別研究生であつた執行・中村両名がその助手となり社会学第一班としてそれぞれ参加した。(原宏氏も同二班岡田班に参加) 私事になるが、私にとつてはこれが研究者としての姿勢を正す重大な動機づけとなつたものだけに、生涯忘却できない決定的な事件となつてゐる。八学会連合対馬共同調査の実施は、本学会そのものにとつても無関係だつたわけではない。朝鮮動乱のさ中に企画された対馬調査への準備に忙殺され、予定されていた春季大会を中止せざるを得なかつたといふ意味だけでも。

第七回大会の規程は、このようにして飛躍的に拡大した。有力会員が続々と入会され、会員数も第六回大会時

70名余りに、第七回大会ではいつきに百名を超えた。

それに新制大学の社会学関係者がこぞつて学会参加の意欲を示すようになつたこと、小・中・高校における社会科教師の間に、生活カリキュラム運動と相俟つ郷土研究の技法や問題意識が高まつてきたことなどがあつただろう。しかし記録されていない裏面の事実として、関西社会学会との境域問題の解決があつたことを、とくにここで明らかにしておきたい。

本学会は前述したように、まつたく自主的な研究団体として発足したため地理的境界は二義的であつた。むしろ指導的メンバーとの人的なつながりを通して、おのずから一定の範囲が画されてきた。それは九州一円から山口県にかけて、そして第五、六回頃から広島・島根に及んだ。この間、日本社会学会による支部学会の編成がすすめられ、関西社会学会も組織された。問題はここで岡山県の去就をめぐり西部社会学会と関西社会学会が対立する場面を生じた。さいわい喜多野委員長の親学会における説得が奏功して、岡山は西部へ、つまり中國・九州が本学会の境域に含まれることになつたのである(四国は関西となる)。この決定によつて、坂元彦太郎・岡山大学教育学部長(教育社会学)をはじめ古屋野正伍氏(社会学)、谷口澄夫氏(日本史)、石田寛氏(人文地理学)

が帶同して参加、以後本学会の有力な一翼を構成することとなつた。

このほかにも第七回大会での新加入者は多士済々である。原宏、岩間敏、宮崎力藏、細川顯一、まだ幾人がある。原田敏明教授(当時熊大)もそうだが、現委員長内藤莞爾教授もこの回が初登板であつた。

有力な会員を多数迎え入れた本学会としては、研究交流の場をさらに拡充する意味で、機関誌なししそれに準ずる出版物を刊行したら、という意見が総会で真剣に論議されたことがあつた。せめて「新刊案内」とか「書評集」といつた形式でも、という希望で、乏しい財源にひびかないよう、本大会のあと事務局の手でがり版の粗野な冊子を作製してみた。しかし素人のかなしさ、あまりにも粗末な出来ばえで、かえつて喜多野委員長のお叱りをうける体たらく。拡大したとはいへ、出版活動を展

開するほどの力量はいまだしてあつたというが実情であろう。

ところで委員組織にも若干変更があつた。当時の隆盛を端的に物語る豪華な顔振れなので記録しておきたい。

委員長	委員 本部	福岡・佐賀	徳永 新太郎
岡山	坂元 彦太郎	山口・鳥根	坂田 太郎
広島	上田 一雄	今崎 秀一	
熊本・大分	原田 敏明	大山 彦一	
鹿児島・宮崎			

(未完)

(九州大学)

研究通信 19

目 次

研究ノート

- 炭鉱離職者の類型とその諸属性 金屋 平三
アノミー・疎外の心理主義的アプローチ 牧 正美
パースンズ理論による集団類型論へのアプローチ 石川 義之

学会ノート

- 西部社会学会由来記(IV) 中村 正夫

書 評

- 大道安次郎、老人社会学の展開 鈴木 広

事務局通信

- お 願 い 鈴木 広
会 員 動 向
第24回大会 プロ グラム
編 集 後 記

1967・5

西 部 社 会 学 会 発 行

西 部 社 会 学 会 由 来 記 (IV)

中 村 正 夫

(八) 新生のオ一步一オ八回鹿児島大会
オ八回大会は昭和二六年五月二六、七日、鹿児島大学文理学部で開催された。いうまでもなく、オ六回大分大会から参加された故大山彦一教授のご尽力によるものであつた。鹿大文理学部はまた、西日本の新制大学としては山口大学文理学部と並んで、社会学の専攻課程が設置された重要な拠点であり、その意味ではむしろ遅きに失したといつてもよい。

しかしオ八回大会開催地の決定にあたっては、ことほど左様に、ことがスムーズに運んだわけではなかつた。この間のいきさつを顧みれば、当時の西部社会学会にみなぎっていた旺盛な意欲をある程度つたえることになると思うので、すこし触れておきたい。

開催地の決定は、恒例として前年度大会の総会で審議されることになつてゐるが、オ七回大会で候補として浮

び上つたのは、長崎案・鹿児島案・岡山案とあり、また原則として九州地方と中国地方とを交代で開催すべし、などの意見もでた。かなりの論議を経てそれのものにしほることがむづかしくなつた。総会席上では結局、積極的な意義が認められたが、このためかえつて一ヵ所にしほることがむづかしくなつた。総会席上では結局、決着をみることができなくなり、あらためて後日の委員会に付託されることになつたのである。こんなことは、あとにも先きにもみられないことであった。

各地区責任者が開催担当校として予想される物心の負担や繁雑さを敬遠して、大会招致をおたがいに譲り合つたため、こんな混乱を生じたというのでは決してなかつた。むしろ事情は逆である。前号で新制大学の誕生は社会学の「地方化」に望ましい結果をもたらした、という意味のことを指摘しておいた。発足以来すでに三年目。各県各大学とも大会を招致するだけの基礎条件は具備す

るにいたつている。しかも名大学とも、当該大学関係者のみならず、高校・義務制の社会科担当教師や在野の人たちをふくめて、斯学に関心のあるすべての研究者を学會組織に糾合するには大会招致にしくものはないとして、地元開催の意義を高く評価していた。つまり、大会招致を機縁として大学じたいが名実ともに地方研究者のための研究センターとなりうるという認識、かつそのことが焦眉の要請でもあるという配慮が名候補地の責任者に強く自覚され、そのためおたがいに次期開催をめぐって競合するという状況を呈するにいたつたのである。西部社会学会としても、まったく冥利につきる思いである。

事実この前後ほど、社会学研究への関心がホウハイとしてたかまつたことはないかも知れない。西部社会学会はまさに「上げ潮」気運がみなぎつてゐた。時あたかも、四月にマツカーサーが罷免されてリツジウエイが就任、そして全面か単独かの講和問題で世論は騒然としていた。結局は九月八日、片面講和条約・日本安全保障条約調印の運びとなり、こんにちにおよんでいるのだが、ともかくこれによつて日本の占領時代がおわり、独立国としての新しい歩みがはじまることになる。そして新生日本を民主國家として再建しようとする国民的意欲、これが社会学研究にたいする期待と要望の底流にあるもつとも根

源的な力であつたことをあらためて想い起す必要があるだろう。

オ八回大会開催地は、のちの委員会で鹿児島大学と決定する。場所的には南の端、交通条件、生活条件が現在とはくらべものにならないほど不便なままだつた當時にもかかわらず、参集した会員は多きを数え、研究発表もつぎに示すように質量において充実した。こうして鹿児島大会において「西部社会学会はここに……まさしく新生のオ一步を踏み出した」(総会における徳永教授の挨拶)ともいうべき盛況裡に進行した。

五月二六日(前九〇〇~一二〇〇)

司 会 内 藤 実 爾

(1) 恩田小作の研究 東筑高 原 宏

(2) 近世村落構成の一考察 岡山大 谷口 澄夫

(3) 薩藩の一向宗禁制について 大河内浩爾
—特に隸農の身分解放を中心にして—

対馬の村落 南西諸島の社会学的調査 九 大 喜多野清一
同 日 (后一〇〇~四〇〇)

オ会場 司会 坂田太郎・今崎秀一
ウオルムス社会学管見 長崎才 渡瀬 浩

(2) 社会性 (Sociability) の社会意識について

(3) 社会変動についての一考察	田川高	細川順一
(4) 中小工業経営者の類型	福商大	今崎秀一
(5) 職業統計に於ける職業上の地位について	九工大	岩間巖
(1) 対二会場	司会	徳永新太郎・大山彥一
(2) 實存主義の社會思想	大分大	羽倉一雄
(3) 低度社会に於ける思惟様式	佐賀大	野口隆
(4) 物の周囲をめぐる民俗に於けるめぐること自体の原義の考察	山口大	坂田太郎
(5) 文化間教育	中西定雄	

五月二七日（前九〇〇七一二〇〇）

少年問題研究協議会

(1) 非行の原因	内藤莞爾
(2) 犯罪防止と社会環境の調整	桜井匡
(3) 少年犯罪の趨勢	三角栄藏
(4) 少年審判の現状	鹿児島前原晃郎

みられており、オ一日午後の研究発表は二会場に分散せねばならなかつた。またオ七回大会で好評を博した少年問題研究協議会を、今回も二日目の午前にて、地元関係当局者の出演をえて成功裡におこなわれた。

は昭和二年にいちど始められ、その後いつとはなしに沙汰止みとなつてゐた。昭和二六年あらためて再開されたわけであるが、「社会生態學について」（中村）、「バーソナリティ論における社会学的地位」（執行）、「山村の同族團」（二宮）など、研究室員の報告を中心として活潑な論議が展開された。懇親会は西部社会学会の支部結成といふ点でまさに画期的であつた。昭和二六年五月二一日、原田敏明教授の公室である熊本大学法文学部長室でオ一回研究発表会をかねて発会式がおこなわれている。折よく内藤助教授が非常勤講師として出向中、特別参加して研究発表もおこなつた。ちなみに題目をあげてく。

（九）ルース台風下の臨時大会

次期大会開催地の決定は、前回をうけてやはり重要議題となつた。しかし成り行き上、さきに鹿児島案とせり合つた岡山案が委員会案として提案され、万場これに賛成した。中國・四国方面の会員獲得とあわせて、すでに岡山市に設立されていたミシガン大学日本研究所との交流を深めるという意味から、地元会員からも強力に要請された。とくに責任者として発言したのは岡山大学の谷口澄夫氏であったが、いまや藩政史研究家としてゆるぎない地位にある。この頃、氏は村落史研究の立場から社会にも深い関心をよせ、当地の組織者として活動された

(1) 漁村の労働関係とその社会的基礎	九大	内藤莞爾
(2) 天草の漁村	熊大	岩本政教
(3) KolbのNeighbourhoodについて	熊短大	大藪寿一

熊本短期大学オ二部内に仮事務所を決定、その後の着実な展開が期待されるところであつたが、間もなく實質的なプロモーターであった大藪氏が大阪市大に転身するに及び、立消えとなつてしまつた。筆者はこの年一〇月熊大に就任することになるのだが、折角の芽生えを育

みる「顔」がものをいひたのである。この顔は、のちになつて日本社会学会大会を招致、主要都市以外の開催地として初の試みを成功させたという形で、さらに真価が發揮されることになるのだが。それはそれとしても、こののち大会スケジュールに「見学」がつけ加えられるにいたつた先鞭は、この鹿児島大会であつた。こうしてオ一回目の鹿児島大会では、西部社会学会が一つのビーグルに達した。この会から佐賀高校野口隆氏（現、広島大）や唐津高校田代栄二氏（現、西南女大）などが初参加、二宮哲雄（桃山学院大）・西山美穂子（神女院大）・江頭竹一郎（熊本家裁）らも新卒者として初登場、いすれも総会席上で新加入者として承認された。

このほか総会の主要な議題をひろつてみると、当時の西部社会学会が内包するエネルギーがうかがわれる。まず報告事項の中では九大社会学研究室での「集談会」の復活と、「熊本社会学会」の結成があげられる。集談会

が、その功績はまことに大きい。

さてオ七回大会総会で年一回大会開催の線で決定をみており、しかも日本社会学会大会の秋季開催がほぼ確実なところで、次期大会は昭和二七年の春、岡山大学を担当として開催する予定であるが、これに統いて山口大学で臨時大会を開いたらいかがか」との緊急提案がなされた。

ところが、総会前の委員会議事を持ち越した形で山口大学の坂田太郎氏から「本年秋、広島大学で日本社会学会が開催される予定であるが、これに統いて山口大学で臨時大会を開いたらいかがか」との緊急提案がなされた。

当時たまたま山口大学にスマイスが文化人類学と社会学の外人教授として来講中であり、また当大学関係者の会員が五名いる上、経済学部内で経営社会学や産業社会学への関心も高まりつつあるので、時宜をえた会合といえるのではないか、という次第である。年一回の線を固執すべきかどうか、中には勤務の都合上年二回開催に難色を示す人もあつたが、大勢としてはその積極的意義に傾いた。かくてオ九回大会は、臨時大会という含みのもとで、同年秋山口大学経済学部を会場として開催されたこととなつた。

昭和二六年一〇月一六日、研究発表はこの日一日で終了し、あと総会なしの懇親会、翌一七日はほぼ終日秋芳洞見学にあてられ、臨時大会にふさわしくリラックスし

は規模の大きさ、内容のバーライエティにおいて圧巻であった。
視聴覚教育の先達として有名であるが、もともと社会学の出である坂本彦太郎教授が教育学部長、そのため主催校としての万端の配慮が行き届いており、大会委員の谷口澄夫氏を介しての富有県岡山の地元協力体制も充分であつた。会員参加三〇数名、傍聴者約百名という会場の充実ぶりが、端的に物語っている。大会プログラムから研究発表や公開講演の模様をみてみよう。

五月三一日（前八・三〇・一・二・〇〇）

司会 近沢敬一・中村正夫

九 大 西山美穂子

東外大 小森 哲郎

長崎商高 渡瀬 浩

細川 順一

田中川 中央高

R・J・スミス

ミシガン大

岩間 敏

九工大

福商大

今崎 秀一

- (1) 世論と偏見
(2) 芸術社会学の発展
(3) 社会的勢力の成立
(4) 事大主義思想の社会学的考察
(5) 日本農村の文化人類学的実態調査
(6) 新聞モニターリング
(7) 産業革命に於ける社会変動について

同 日（后一・〇〇・一・五・〇〇）			
司会 坂田太郎・岩間 敏			宏
(1) 対馬北部村落の社会構造 ——佐護郷井口里と井口浜の形成——	東筑高 原	鹿 大 河野 通博	岡山大 谷口 澄夫
(2) 対馬村落における同族関係と親方子方関係	熊 大 中村 正夫	鹿 大 大山 彦一	鹿 大 田代 栄二
(3) 対馬外來商業者の定着と成長	岡山大 河野 通博	二宮 哲雄	二宮 哲雄
(4) 山村の社会史的性格の一考察	岡山大 谷口 澄夫	唐津高 田代 栄二	唐津高 田代 栄二
(5) オロチヨン族のシャーマニズムとその社会的役割	鹿 大 大山 彦一	中尾 英俊	中尾 英俊
(1) 日向山村における家族形態の変遷	鹿 大 大山 彦一	八木 佐市	八木 佐市
(2) 北九州炭坑地域社会に於ける不良性と 家庭環境について	鹿 大 大山 彦一	ミシガン大 J・M・ホール	ミシガン大 J・M・ホール
(3) 農村における家畜	鹿 大 大山 彦一	廣島大	廣島大
(4) 若者宿について	鹿 大 大山 彦一	八木 佐市	八木 佐市
(5) 米国における日本研究	鹿 大 大山 彦一	佐市	佐市

た雰囲気で終始した。だが実際には、そう安穩だつたともいえない面があつた。一三・四日と九州一帯を襲つたルース台風は十五日夜にかけて中國地方を吹き荒れ、広島から山口への移動が大変だつたのである。九州各地の甚大な災害状況が報じられ、列車不通の心配もまじつて、山口にはたどりついたものの、その夜はまんじりともできなかつた。しかし文字どおり颪風一過、翌朝風はまだ樹々をはげしくゆさぶつていたが、やがて静穏にかえり、一七日の秋芳洞見学の際にはかえつて秋空がすみきつていた。

山口開催は今回すでに二回目。坂田教授の提案理由とされた趣意は、馬場克三教授（九大）や三戸公氏（九大）などの経営学陣からの特別参加と研究発表によつて生かされ、全部で九人の発表者という小じんまりした大会ではあつたが、内容的に新味も加わつてそれなりの意義があつた。

（十）ミシガン大学日本研究所との交流

オ一〇回大会は予定どおり、昭和二七年五月三一日より六月二日にかけての三日間、岡山大学教育学部で開催されることになる。さすが万を持してこの日あることを期していた地元会員の設営の見事さもあって、岡山大会

公開講演

(1) キリストン部落の宗教社会学的調査

九 大 古野 清人

(2) 民族接触と文化接触

阪 大 蔵内 数太

以上をみわたしてみると、まずミシガン大学日本研究所から所長のホール教授とスマス氏が参加発表して国際色をそえたことがオ一にあげられる。ホール教授は日本で生れ育った人で日本語が至極堪能であるばかりでなく、日本学者としてすでに著名であった。つぎに農業綜研から中尾英俊氏（現、佐賀大）が発表し並木正吉氏が参加して、喜多野夢村社会学との接觸を深めたこと、原・中村・河野らが九学会対馬共同調査の成果の一端を紹介したこと等々が目立った特色としてあげられよう。公開講演では、両教授の含蓄ある見解が披瀝されて印象深かつた。ことに古野教授は、五島その他西北九州の離島におけるキリスト教化を探訪され、いわゆる「かくれ」の信仰が俗信化に堕して本来のキリスト教義から別種のものになつてゐる点を鋭く指摘されたが、それは後年『穏れキリスト』となつて結実する。

最後に総会議題となつた主要な事項を列記して、この頃の本学会の動向の一端をうかがうことにする。

(一) 会費値上げの件

従来の百円会費の二百円値上げ

た

このようにして二日間にわたり大会行事が一応終了すると、三日目には岡山大学のスクールバスによる「社会見学」が予定されていた。後楽園——ミシガン大学日本研究所——興除村——倉敷民芸館といったコースで約六時前の行程、ふりの篠光客ではとうてい望めない豊富なコースであった。各地点とも事前の連絡が周到だつたためか、さきさきで懇切な案内をうけ、いまでも確かな印象となつて記憶にとどまっている。岡山大会全体をとおしての充実感が、ここに尽きる思いであつたといえは誇張になるであろうか。

おわりに

西部社会学会は昭和四二年度をもつてオ一五回大会を近く迎えようとしている。このところ、社会の相対的な安定ムードがただよっている。本学会もまた、そうした社会的安定を多少とも反映して、ほほ順調な道行きをたどっているよう思える。しかし、それかもしまんネリにつうするようであれば、あらためて自戒しなければならない。そのときは、学会も初心にかかる意味で、本学会の創立過程からその基礎がほぼ確立した時期までの過去を回顧するのも一つの手かもしれない。そんなわたし

を可決。倍増といえば大きいが、當時インフレではやむなき処置として会員からの強い支持によつて決定をみた。

(一) 本部事務局移動の件 持廻りないし移転案が喜多野委員長より提案されたが、他大学の現状はその負担に耐ええないとして九大常置と決定。

(一) 年一回（春季）大会開催の件 オ七回大会決定を山口臨時大会の開催にかんがみ原則として再確認する。

(一) 開催地決定基準の件 「福岡と他地区」との交互開催が原案としてだされたが、さらに限定して「九大と他地区」と修正可決を見る。

(一) 委員組織および改選の件 熊本大分地区委員岩崎継生氏の辞任のため、かわって原田敏明氏が就任、喜多野清一氏のほか内藤堯爾氏を本部委員として追加、他の委員は留任と決定。委員組織については大分分離案、さらには九州一県一委員案などがでたが、それぞれ検討の末、前者は大会地区委員の意向にはかるとして、後者は時期尚早というので見送り。

(一) その他 日本社会学会理事として臨席され、しかかも本学会の名譽会員でもある蔵内教授は、地区毎の研究状況を本部で集約とともに、この情報にもとづき日本社会学会との連繋を強化することの必要が強調され

なりの感想をこめて、オ一〇回大会までのプロセスを四回にわけて書いてみた。

（了）

またはじめに記しておいたように、往時を知らない会員がふえた現在、初期の学会活動の様子を伝えること自体にも意味があると考えた。しかしいたずらな冗談ばかり多くして、肝心のエトスを描き出すという本来の目的は達成できなかつたのではないか。ともかく一〇回大会までをまとめておけば、わたしなりの任務はおわかつた。あともし書く必要があるとしても、もっと適當な人がたくさんいる。